HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小・中学生の生活意識と遊び ： 札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査 II
Author(s)	加藤, 弘通; 水野, 君平; 侯, 月江 他
Citation	子ども発達臨床研究, 13, 1-10
Issue Date	2019-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.13.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73671
Type	departmental bulletin paper
File Information	020-1882-1707-13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

資料論文

小・中学生の生活意識と遊び

～札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査Ⅱ～

加藤　弘通[1]・水野　君平[2]・侯　玥江[2]・濤岡　優[2]

The Survey of current situation of Children in Sapporo from perspectives of school adaptation, parent-child relationship, and play in winter.

Hiromichi KATO, Kumpei MIZUNO, Hou YUEJIANG, Yu NAMIOKA

問題と目的

本研究は「さっぽろ子ども・若者白書」をつくる会と北海道大学大学院教育学研究院子ども発達臨床研究センター・子ども発達支援部門が共同プロジェクトとして行っているアンケート調査から札幌市の小中学生の生活実態について報告するものである。なおこれまでの実態調査の結果については、太田・柳・水野・加藤（2016）、加藤・水野（2018）があり、本研究は、2017 年度冬期に行われた調査をもとに分析をしたものである。

本研究では、札幌市の小学生・中学生の学校・家庭・自己に関する意識の実態、およびその関連要因を明らかにするとともに、本年度は雪国における冬期の遊びの実態についても検討する。というのも、札幌市は日本国内でも有数の積雪量を誇る都市であり、１年のうち約半年間、子どもの生活は雪の影響を受けることになる。したがって、この間、雪が降らない他地域の子どもたちとは異なった生活、遊びの形態がとられることが予想されるからである。また体格や体力との関連では、北海道の児童生徒は肥満傾向児の出現率が例年、全国平均よりも高く（北海道教育委員会、2017）、特に小学生でその傾向が顕著である。さらに北海道の児童生徒の体力・運動能力の低さは、こうした肥満率の高さに起因しているという指摘もある（秋月・神林・森田・奥田・志手・石澤・中道・中嶋・新開谷、2015）。こうしたことには冬期における運動や外遊びの経験の不足が関連していると考えられる。

そこで今年度の調査では「冬に札幌の小学生、中学生はどれくらい友だちと遊んでいるのか」、また遊んでいるとしたら「どこで何をして遊んでいるのか？」という素朴な問いを解明することを課題とした。また併せて、遊びの経験の有無や種類が、学校や家庭における居場所感や健康状態、友人関係や自尊感情といった他の要因とどのように関連しているのかも検討する。

方　法

１．調査協力者

札幌市内の公立小学校 7 校 51 学級の 4 ～ 6 年生 1,501 名、公立中学校 12 校 157 学級の 1 ～ 3

[1] 北海道大学大学院教育学研究院　准教授
[2] 北海道大学大学院教育学院　博士後期課程

10.14943/rcccd.13. 1

年生 4,739 名、計 6,240 名。対象者の性別、学年、学級種、在住区の内訳は Table 1〜3 の通りである。

2．手続き・調査内容

各学級担任を通して質問紙調査を配布、実施した。質問紙の内容については、①学校生活について（4 項目）、②授業について（教科の好み、理解・関心度、各 11 項目）、③授業や宿題で分からないときの対応（5 項目）、④友だちとの関係（4 項目）、⑤教師との関係（5 項目）、⑥学校・家庭への安心感（2 項目）、⑦遊びの経験（1 項目、自由記述）、⑧家族関係（3 項目）、⑨自分への意識（7 項目）であった。⑦以外は、「まったくあてはまらない（1 点）〜非常に当てはまる（5 点）」までの 5 件法で回答を求めた。

実施時期は 2017 年 11 月〜12 月であった。

Table 1　調査協力者の内訳（人）

		男子	女子	計
小学校	一般学級	757	732	1,489
	特別支援学級	8	2	10
	計	765	734	1,499
中学校	一般学級	2,366	2,351	1,838
	特別支援学級	7	7	14
	計	2,373	2,358	4,731

Table 2　各区の調査協力者の内訳（人）

中央区	1,327
北　区	180
東　区	423
白石区	933
豊平区	627
南　区	358
西　区	636
清田区	719
手稲区	422
厚別区	620

Table 3　各学年の協力者数の内訳（人）

小学校	4 年生	513
	5 年生	513
	6 年生	472
中学校	1 年生	1,699
	2 年生	1,547
	3 年生	1,493

結　果

1．学校・家庭・自己に対する意識

学校、家庭、自己についての意識を知るために、「学校は楽しい」「家庭は楽しい」「自分のことが好きだ」それぞれについて、学年別の回答割合を Figure 1 〜 3 に示した。まず「学校は楽しい」（Figure 1）については、7 〜 8 割強の子どもが肯定的な回答（「どちらかというとあてはまる」+「とてもあてはまる」）をしていた。学年別にみると、小学生では 5 年生で肯定的な回答の割合が低く、否定的な回答の割合が高くなっていた。一方、中学生では 1 年生と 2 年生、3 年生で比較的大きな違いがみられ、2 年生以降で肯定的な回答の割合が減り、否定的な回答の割合が 1 割を超えていた。

次に「家庭は楽しい」（Figure 2）については、7 割〜 9 割弱の子どもが肯定的な回答をしていた。学年別にみると、学年を追うごとに肯定的な回答の割合が減り、否定的な回答の割合が増える傾向がみられた。また「どちらともいえない」という回答が、小学 5 年生で増加し、中学 2 年生以降で再び増加するという特徴もみられた。

最後に「自分のことが好きだ」（Figure 3）については、上記の 2 つと大きく異なって、肯定的な回答の割合が少なく、否定的な回答の割合が多い。特に 5 年生以降は、否定的な回答の割合が肯定的な回答の割合を超えており、「どちらともいえない」の割合が 4 割を超えている。また学年による違いもそれほど明確にはみられなかった。

2．学校・家庭・自己への意識と関連要因

(1)　学校への意識と関連要因

それではこうした学校や家庭の楽しさ、および自己に関する意識には、どのような要因が関連しているのか。まず学校への意識の関連要因を検討

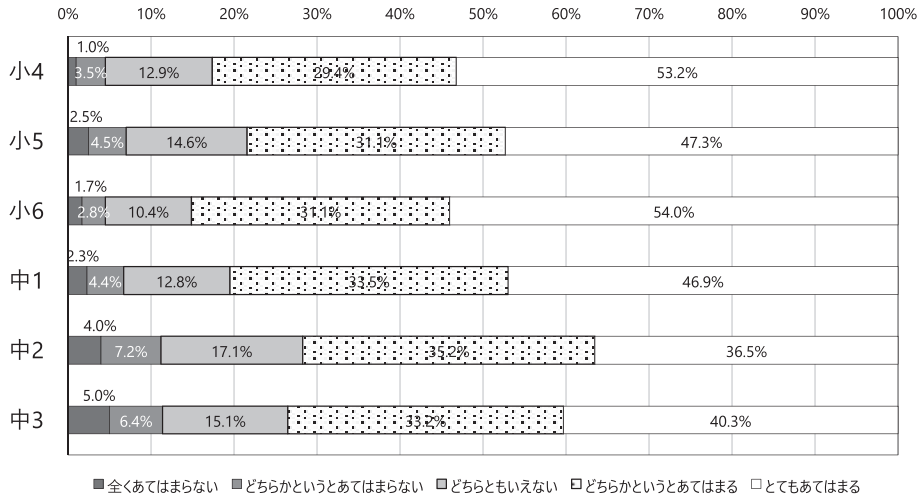

Figure 1 「学校は楽しい」の学年による比較

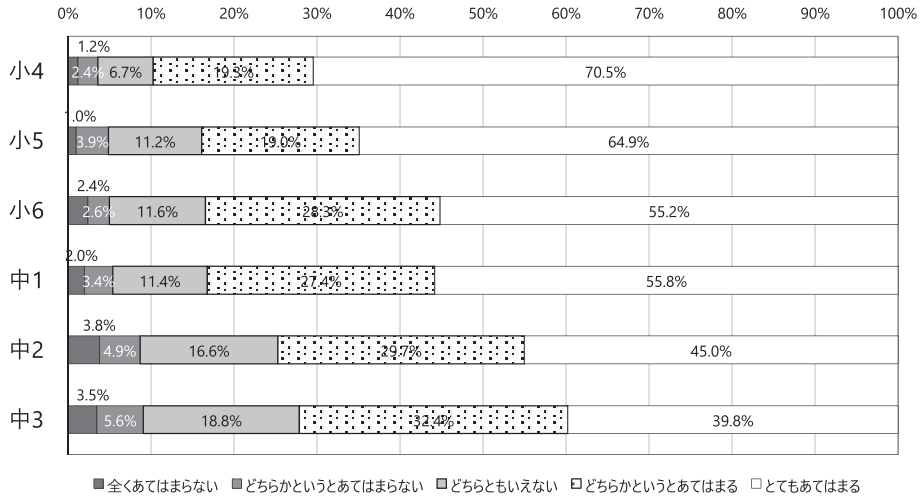

Figure 2 「家庭は楽しい」の学年による比較

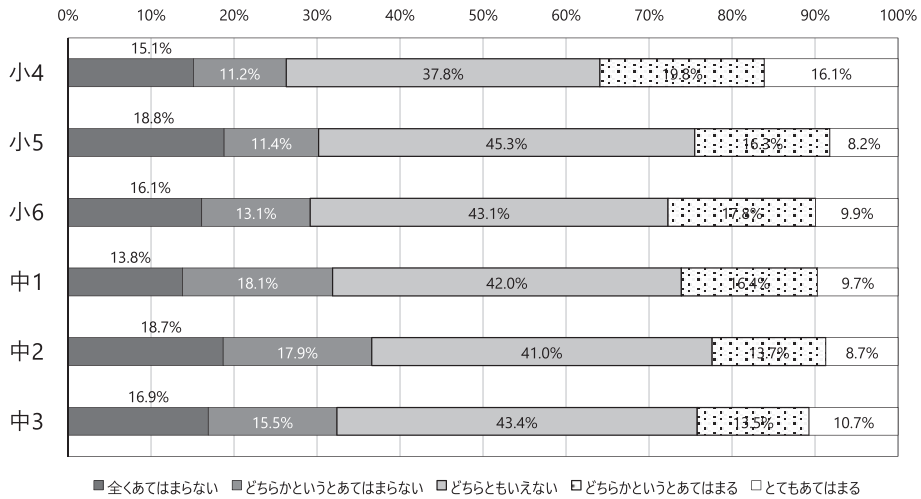

Figure 3 「自分のことが好きだ」の学年による比較

Table 4 「学校は楽しい」と関連要因との相関

	小学生	中学生
学校の授業（勉強）は楽しい	.589**	.548**
学校の行事は楽しい	.498**	.600**
「学校に行きたくない」と思うことがよくある	−.441**	−.506**
学校は「安心できる場所」である	.565**	.607**
友だちはたくさんいるほうだ	.402**	.456**
友だちといると楽しい	.402**	.472**
先生は私の話を真剣に聞いてくれる	.387**	.322**
先生は私が困ったときに相談にのってくれる	.339**	.324**
先生は私の気持ちをわかってくれる	.348**	.350**

** $p<.01$

するために、他の学校生活に関する要因、友人関係、教師との関係に関わる要因と学校の楽しさの関係について、校種別に Pearson の積率相関係数を求めた（Table 4）。

小学生では「授業（勉強）は楽しい」（$r=.589$、$p<.001$）がもっとも強く関連し、次いで「学校は『安心できる場所』である」（$r=.589$、$p<.001$）が比較的強く関連していた。それに対し、中学生では「学校は『安心できる場所』である」（$r=.607$、$p<.001$）と「行事は楽しい」（$r=.600$、$p<.001$）が強く関連しており、次いで「授業は楽しい」（$r=.548$、$p<.001$）と登校回避感情である「『学校に行きたくない』と思うことがよくある」（$r=-.589$、$p<.001$）が比較的強く関連していた。小中学生ともに授業と安心に関わる要因が、学校の楽しさに関連しており、改めて、授業と居場所としての学校の機能が重要であることがうかがわれる。

上記の要因に次いで学校の楽しさに関わっていたのは、「友だちはたくさんいるほうだ」「友だちといると楽しい」といった友人関係の要因であった。また小学生に比べ、中学生のほうが相関係数の値が高く、友人関係が学校の楽しさに関わる要因として、より強く関連していることがわかる。さらに教師との関係についても、小中学生ともに正の相関がみられ、教師との関係が良いほど、学校生活を楽しいと感じていることがわかる。

(2) 家庭への意識と関連要因

家庭への意識の関連要因を検討するために、他の家庭生活に関する要因、および不登校感情と家庭の楽しさの関係について、校種別に Pearson の積率相関係数を求めた（Table 5）。

小学生では「家庭は『安心できる場所』である」（$r=.411$、$p<.001$）がもっとも強く関連しており、次いで「家族は自分の話をよく聞いてくれる」（$r=.373$、$p<.001$）、「家庭での心配ごと」（$r=-.364$、$p<.001$）が「家庭は楽しい」と関連していた。同様に中学生でも「家庭は『安心できる場所』である」（$r=.746$、$p<.001$）と「家族は自分の話をよく聞いてくれる」（$r=.743$、$p<.001$）が関連していた。しかし、相関係数に注目すると、小学生に比べ、中学生の相関係数のほうが高く、これら2つの要因が非常に強く関連していることがわかる。つまり、家庭は「安心できる場所」である、家族は自分の話を聞いてくれると思っている者ほど、家庭を楽しいと感じていること、特に中学生においてはその関連性が極めて強いといえる。

一方、「家庭での心配ごとがある」については、小中学生ともに負の相関がみられ、心配ごとがある者ほど、家庭が楽しくなくなる傾向がみられる。さらに学校との関連でいうと、「『学校に行きたくない』と思うことがよくある」との間にも、小中学生ともに負の相関がみられ、家庭が楽しくない者ほど、学校に行きたくないと思う傾向が強くなる、あるいは学校に行きたくないと思っている者

Table 5「家庭は楽しい」と関連要因の相関

	小学生	中学生
家庭は「安心できる場所」である	.411**	.746**
家族は自分の話をよく聞いてくれる	.373**	.743**
家庭での心配ごとがある	−.364**	−.350**
「学校に行きたくない」と思うことがよくある	−.349**	−.248**

** $p<.01$

Table 6 「自分のことが好きだ」と関連要因との相関

	小学生	中学生
自分は人から必要とされている	.591**	.671**
自分にはいいところがたくさんある	.618**	.709**
自分は役に立つ人間だ	.598**	.660**
家庭は楽しい	.292**	.280**
学校は楽しい	.286**	.316**
友だちはたくさんいるほうだ	.300**	.343**
友だちといると楽しい	.227**	.229**

** $p<.01$

ほど、家庭が楽しくないと思う傾向が強くなることがわかる。ただし、中学生においては相関係数がそれほど高くないことから、他の要因に比べると、それほど強い関連性があるとはいえない。

(3) 自己意識と関連要因

自己意識の関連要因を検討するために、他の自己に関する要因、家庭の楽しさと学校の楽しさ、および友人関係の要因と自分のことが好きだについて、校種別に Pearson の積率相関係数を求めた（Table 6）。

小中学生ともに「自分にはいいところがたくさんある」（小学生、中学生の順に $r=.618$、$p<.001$；$r=.709$、$p<.001$）「自分は人から必要とされている」（$r=.591$、$p<.001$；$r=.671$、$p<.001$）、「自分は役に立つ人間だ」（$r=.598$、$p<.001$；$r=.660$、$p<.001$）が強く関連していた。次いで高い関連性がみられたのは「友だちはたくさんいるほうだ」（$r=.300$、$p<.001$；$r=.343$、$p<.001$）であり、「友だちといると楽しい」よりも強く関連していた。

また家庭の楽しさ、学校の楽しさもそれほど高くはないが、「自分のことが好きだ」と関連しており、家庭・学校生活が子どもの自己肯定感や自尊感情に関係していることがわかる。

3．遊びについて

(1) 遊びの実態

2017 年度の調査では、この年度に限った調査項目として「（冬の）遊び」を取り上げた。そこで今回の調査では「この 1 週間で友だちと遊ぶことはありましたか」という質問のもと、「あった」と回答した者について、さらに「何をして遊びましたか」とその内容を自由記述で回答を求めた。

Figure 4 は校種・男女・学年別にこの 1 週間における友だちと遊んだ経験の割合を示したものである。小学生よりも中学生のほうが友だちと遊んだ経験が低いこと、また男子より女子のほうが低い。

次に遊びの内容についてみると（Table 7）、小中学生ともにゲームがもっとも多く、次いでス

ポーツであった。しかし、第1位と第2位の遊びの間には大きな差がみられ、特に中学生においては2倍近くの違いある。また小学生ではカード・ボードゲームの割合も高く、室内遊びに興じている者が多い。なお本調査の実施時期が11月～12月の冬期であり、札幌市という冬期の屋外環境が厳しい地域であったことも関係していると考えられる。しかし比較的、類似した気候環境であると思われる長野県における調査（北海道大学教育学部発達心理学研究室、2018）では、小中学生合わせた割合ではあるものの、第1位がスポーツ（41.4%）、第2位が伝統遊び（15.9%）で、ゲームは第3位（14.8%）であった。したがって、単に気候上の問題だけでなく、札幌市の小中学生は、似たような気候をもつ地域の子どもたちと比べても、冬に屋内で遊ぶ傾向が高いと考えられる。

Table 7　校種別の遊びの内訳

	小学校	中学校
ゲーム	23.4%	30.9%
スポーツ	18.1%	16.5%
伝統遊び	16.0%	1.2%
自然遊び（雪遊び）	14.3%	4.1%
カード・ボードゲーム	12.7%	4.8%
おしゃべり	4.5%	10.0%
描画・工作	2.3%	0.7%
友だちの家	2.1%	1.5%
読書・勉強	1.9%	2.1%
ネット・DVD	1.2%	2.1%
商業施設	0.7%	18.9%
食事・料理	0.1%	1.8%
映画	0.0%	2.3%
その他	2.7%	3.2%

また小学生と中学生で大きな違いがあったのは、伝統遊びや自然遊びであり、小学生のほうが、その割合が高かった。伝統遊びには、主に鬼ごっこやかくれんぼが主に含まれるが、「かたき」や「天下」[i]といった札幌市にローカルな遊びも多数含まれていた。このようにその地域限定の遊びが多く含まれるのは、長野の調査結果とは異なる点であった。他地域に比べ、札幌市には明確な地域独自の遊び文化があり、比較的持続している可能性が考えられる。

逆に中学生のほうが高い割合を示したのは、おしゃべりや商業施設であった。商業施設にはショッピングモールで遊ぶや買い物、食事をする、カラオケなどが含まれており、これも長野県の調査結果（2.3%）と比較すると非常に高い値であった。

⑵　遊びと他の要因の関係

遊びと他の要因の関係を検討するために、過去1週間に友だちと遊んだ経験のあった者となかっ

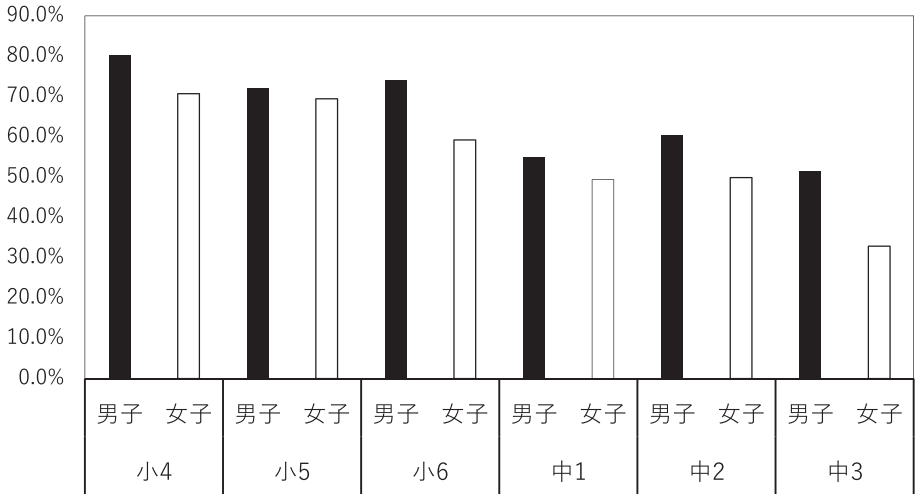

Figure 4　過去1週間で友だちと遊んだ経験

Table 8　遊びの有無による学校・家庭・健康の状態の比較（SD）

	遊びなし		遊びあり	
	小学生	中学生	小学生	中学生
学校は「安心できる場所」である	3.68 (1.18)	3.30 (1.18)	3.95 (1.09)	3.38 (1.22)
家庭は「安心できる場所」である	4.50 (0.90)	4.29 (1.03)	4.61 (0.83)	4.33 (1.00)
今、自分は元気だ	3.95 (1.18)	3.70 (1.19)	4.28 (1.07)	3.90 (1.18)

た者で、学校生活と家庭生活、および健康の状態等に違いがあるかを比較した。具体的には「学校は『安心できる場所』である」と「家庭は『安心できる場所』である」「今、自分は元気だ（心・体）を比較した（Table 8）。

遊びの有無(2)×校種(2)の 2 要因の分散分析を行った結果、学校、家庭、健康いずれも遊びの有無で主効果が認められた（順に F (1,4902) = 19.88、p < .001、η_p^2 = 0.00；F (1,4902) = 5.58、p < .01、η_p^2 = 0.00、F (1,4902) = 47.26、p < .001、η_p^2 = 0.00）。しかし、効果量に注目すると、学校と家庭、健康いずれもほとんどなしであった。したがって、学校や家庭が安心できる場所であるかどうかということ、および心身の健康と、遊ぶか否かにはほとんど関係がないと考えられる。

したがって、友だちと遊ぶ子どものほうが、遊ばない子どもと比べ、学校や家庭に居場所がある（あるいは居場所がない）というわけでも、また元気があるというわけでもないと考えられる。しかし、これは遊び全体を比較したものであることから、次では遊びのタイプに分け、他の要因との関連を検討する。

(3)　遊びのタイプ別による他の要因との関係

遊び Table 7 に示した遊びのなかにはいくつかの異なるタイプの遊びが混在していると考えられる。1 つは、スポーツ、伝統遊び、自然遊びを含む「屋外遊び」であり、2 つは、ゲーム、カード・ボードゲーム、おしゃべりを含む「屋内遊び」である。またそれらとはタイプが違う「商業施設」、それ以外を「その他」とし、4 つのタイプで、学校生活、家庭生活、健康の状態に加え、友人関係および自尊感情との関連を検討した。

具体的には「学校は『安心できる場所』である」

Table 9　遊びのタイプと学校・家庭・健康および友人関係、自尊感情の平均（SD）

	屋外遊び		屋内遊び		商業施設		その他	
	小学生	中学生	小学生	小学校	小学校	中学校	小学校	中学校
学校は「安心できる場所」である	3.96 (1.06)	3.62 (1.22)	3.86 (1.17)	3.32 (1.20)	4.29 (0.76)	3.26 (1.22)	3.80 (1.14)	3.30 (1.19)
家庭は「安心できる場所」である	4.59 (0.83)	4.45 (0.95)	4.65 (0.79)	4.28 (1.02)	4.86 (0.38)	4.36 (0.99)	4.54 (0.90)	4.28 (1.03)
今、自分は元気だ	4.35 (1.03)	4.12 (1.16)	4.23 (1.12)	3.85 (1.17)	4.14 (0.90)	3.90 (1.14)	4.05 (1.14)	3.71 (1.19)
友だちがたくさんいるほうだ	4.41 (0.86)	4.22 (0.91)	4.42 (0.92)	3.91 (1.02)	4.43 (0.79)	3.99 (0.97)	4.12 (1.03)	3.69 (1.17)
友だちといると楽しい	4.76 (0.58)	4.72 (0.67)	4.72 (0.64)	4.58 (0.77)	4.71 (0.76)	4.65 (0.66)	4.55 (0.84)	4.41 (0.90)
自分のことが好きだ	3.02 (1.21)	3.03 (1.18)	3.01 (1.19)	2.90 (1.16)	3.71 (0.76)	2.77 (1.13)	2.92 (1.18)	2.77 (1.16)

「家庭は『安心できる場所』である」「今、自分は元気だ」に加え、「友だちがたくさんいるほうだ」「友だちといると楽しい」「自分のことが好きだ」に対し、遊びのタイプ⑷×校種⑵で２要因の分散分析を行った（Table 9）。

その結果、「学校は『安心できる場所』である」「家庭は『安心できる場所』である」「自分のことが好きだ」では、遊びのタイプにおいて有意な差が認められた（順に $F(3,4940)=8.07$、$p<.001$、$\eta_p^2=0.00$；$F(3,4940)=2.94$、$p<.05$、$\eta_p^2=0.00$、$F(3,4940)=8.32$、$p<.001$、$\eta_p^2=0.00$）。しかし、効果量に注目すると、いずれもほとんどなしであった。したがって、学校や家庭が安心できる場所であるかどうかということ、および自尊感情については、遊びのタイプによってほとんど差がないと考えられる。

また「今、自分は元気だ」「友だちがたくさんいるほうだ」「友だちといると楽しい」でも、遊びのタイプにおいて有意な差が認められ（順に $F(3,4940)=25.98$、$p<.001$、$\eta_p^2=0.01$；$F(3,4940)=33.46$、$p<.001$、$\eta_p^2=0.02$、$F(3,4940)=24.22$、$p<.001$、$\eta_p^2=0.01$）、効果量については小程度の差がみられた。多重比較（Tukey 法）の結果、「今、自分は元気だ」については、その他と屋内遊び、その他、商業施設、室内遊びと屋外遊びの間に有意な差が認められた。つまり、屋外遊びをしている者のほうが、他の遊びをしている者に比べ、自分は元気だと思っている程度が高いということがわかる。

次に「友だちがたくさんいるほうだ」については、その他と商業施設、屋内遊び、また屋外遊びとそれ以外の遊びの間で有意な差が認められた。つまり、屋外遊びをしている者のほうが、他の遊びをしている者に比べ、友だちがたくさんいると答えていることがわかる。最後に「友だちといると楽しい」については、その他と屋内遊び、商業施設の間と、屋内遊びと商業施設、屋外遊びの間で有意な差が認められた。つまり、屋内遊びをしている者に比べ、屋外遊びをしている者のほうが、友だちといると楽しいと思っている程度が高いことがわかる。

考　察

以上、札幌市の子どもたちの生活と意識を検討するために、学校・家庭・自己、加えて冬期の遊びの経験およびどんな遊びをしているのか遊びの種類についてみてきた。以下、本研究の結果、明らかになった点をまとめ、若干の考察を加える。

まず学校については、いずれの学年も７～８割強の子どもが「学校は楽しい」について肯定的な回答をしていた。その一方で小学５年生と中学２年生において若干肯定的な回答の割合が少なかった。次に家庭については、７～９割の子どもが「家庭は楽しい」について肯定的な回答をしていた。学校についての意識とは異なり、学年と共に肯定的な回答が減り否定的な回答が増える傾向がみられた。また「どちらともいえない」と肯定とも否定ともつかない回答が小学５年生と中学２年生で増える傾向がみられた。思春期を親からの自立の時期と捉えると、妥当な結果であると思われる。

とはいえ他の調査と比較すると、内閣府が全国11 地区の小学４年生～中学３年生を対象に平成26 年に行った調査（内閣府政策統括官、2014）では、「学校生活の楽しさ」について「楽しい（80.6%）」「まあ楽しい（16.2%）」、合わせると肯定的な回答が 96.8%であった（ちなみに平成 18 年度では「楽しい(71.8%)」「まあ楽しい(23.4%)」計 95.2%）。この結果と比較すると、札幌市の子どもの学校生活に対する肯定的な意識は７～８割を超えているとはいえ、それが全国の平均と比較して高いとはいえない。

また「家庭生活の楽しさ」について、同調査（内閣府政策、2014）では「楽しい（86.0%）」「まあ楽しい（13.0%）」と肯定的な回答をした者は99.0%であった（ちなみに平成 18 年度では「楽しい（70.3%）」「まあ楽しい（27.1%）」計 97.4%）。この結果と比較すると、学校生活と同様に、札幌市の子どもの家庭生活に対する肯定的な意識は７～９割を超えているとはいえ、それが全国の平

均と比較して高いとはいえない。

また学校生活の楽しさには、小中学生共に昨年度同様、授業と行事、安心感や登校回避感情が強く関係していた。したがって、学校生活の充実を図るためには、何か新たな取り組みが必要というよりも、むしろ、学校がこれまでも大切にしてきた授業や行事といった取り組みを再度見直し、充実させていくことが重要であると思われる。また併せて、学校は安心して過ごせる場所であることや学校に行きたいと思えるという基本的な条件が整えられていることも重要な要因であると考えられる。最後に友だちとの関係や教師との関係も、上記の要因ほどではないが、学校の楽しさと比較的強く関連していた。したがって、これについても何か新しいプログラムといったものが必要というよりも、教師が生徒とある程度余裕を持って、きちんと向き合えるといった当たり前のことが、当たり前に行えるような現場の環境整備が必要であると考えられる。

次に家庭については、「家庭は『安心できる場所』である」と「家族は自分の話をよく聞いてくれる」が比較的強く、家庭生活の楽しさと関連していた。特に中学生においては、「家庭は『安心できる場所』である」が $r = .764$、「家族は自分の話をよく聞いてくれる」が $r = .743$ と極めて高い相関係数を示していた。したがって、特に中学生において、家庭生活を充実させるためには、家庭における安心感と親の受容的な関わりが重要になると考えられる。

また文部科学省の調査では不登校の要因として「家庭に係わる状況」が一番の要因としてしばしば指摘される。例えば、教師の報告に基づく文部科学省（2018）では、不登校のタイプ別の要因として、不安の傾向があるタイプの 31.2%、無気力の傾向があるタイプの 45.0%、あそび・非行傾向のあるタイプの 44.4%に「家庭に係わる状況」がその要因として関係しているおり、4 タイプあるうちの 3 タイプの不登校において家庭の要因が第 1 位であった。そこで本研究でも家庭の楽しさと登校回避感情の関係性について検討したところ、小学生で $r = -.349$、中学生で $r = -.248$ であった。したがって、小学生においては家庭生活が不登校と比較的強く関連している可能性がある一方で、中学生においては、その関連性はそれ程強くない可能性があることが示唆される。

自己については、小学 4 年生を除き、すべての学年で肯定的な回答よりも否定的な回答の割合が上回っていた。また 5 年生以降は「どちらともいえない」という割合が 4 割を超えていたことから、この時期、自己の評価について決めがたく、逡巡している姿が推察された。また発達心理学的に見た場合、自尊感情の低下は、思春期一般にいわれることである。したがって、札幌の子どもたちの自尊感情が低いということがそのまま問題であるということを意味しているとはいえない。

最後に「遊び」についてであるが、学年が上がるにつれて、友だちと遊ぶ経験が少なくなること、また男子よりも女子のほうが少ないという結果がみられた。内容については、ゲームが一番多く、これは長野における同様の調査結果では、スポーツが一番多く、それとは異なっていた。しかし、遊びに関する他の実際調査を参照すると、その多くではゲームが一番多いことから（増山、2011；バンダイ、2018）、全国一般と同様の傾向を示していると思われる。しかしだからと言ってそれで良いというわけではなく、北海道の児童生徒の体力の低さや肥満率の高さを考慮すると、体を使った活動が行える冬場の遊び場の確保は重要な課題であると考えられる。

また遊びのタイプと他の要因との関連性については、差は小さいものの、健康状態や友人関係の多さ、友だちといることの楽しさ等については、遊びのタイプによって差がみられ、屋外遊びをしている子どものほうが、健康状態が良く、友だちも多く、友だちとの関係を楽しいと感じている程度が高かった。一般的に外遊びが推奨されるが、札幌市の調査においても、外遊びをしている子どものほうが、他の遊びをしている子どもと比較して、肯定的な結果が得られたことは、従来の指摘を支持するものであると考えられる。したがっ

て、こうした結果からみても、冬場に外遊びが困難になる札幌市の環境を考慮した対策や施策が重要になると思われる。

文　献

秋月茜・神林勲・森田憲輝・奥田知靖・志手典之・石澤伸弘・中道莉央・中嶋寿宏・新開谷央　2015　北海道における児童・生徒の肥満度と体力・運動能力の関係　北海道体育学研究，50，53–60.

バンダイ　2018「小中学生の遊びに関する意識調査」結果　バンダイ子どもアンケートレポート，No.243 http://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question243.pdf（2018/12/25）

北海道大学教育学部発達心理学研究室　2018　2017年度調査　長野の子ども白書・報告書

北海道教育委員会（2017）平成28年度全国体力・運動能力、運動週間等調査【北海道版結果報告書】 http://www.tairyokukekka.hokkaido-c.ed.jp/index_h28.html（2018/12/25）

加藤弘通・水野君平　2018　札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査　Ⅰ：学校・家庭・自己および居場所に注目して　子ども発達臨床研究，10，1–10.

増山均　2011　放課後の遊びについてのアンケート調査 https://www.sawayakazaidan.or.jp/asobi_hiroba/data/part02.pdf（2018/12/25）

文部科学省　2018　平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm（2018/12/25）

内閣府政策統括官　2014　小学生・中学生の意識に関する調査報告書　https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf_index.html（2018/12/25）

太田一徹・柳悌二・水野君平・加藤弘通　2016「学校・家庭と自分に関する」小学生・中学生アンケート調査　さっぽろ子ども・若者白書をつくる会編　さっぽろ子ども・若者白書，pp.247–269.

[i] 「かたき」も「てんか」も複数のボールを使うドッチボールに似た北海道ローカルのボール遊び。学校や地域によってルールが異なる。